『あかねちゃん』

高良あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『あかねちゃん』

【Ｎコード】
Ｎ５８４６Ｋ

【作者名】
高良あくあ

【あらすじ】
「その日、あかねちゃんは……」　ごく普通の小学生『あかねちゃん』を巡る、投稿型のホラー連作短編。サイトにて投稿受付中です。

おとしもの

その日、あかねちゃんは学校から、少し遠回りをして家に帰りました。

特に理由はありません。強いて言うなら、その日はとても楽しかったから、でしょうか。友達と別れたくなくて、あかねちゃんの家から少し離れている、友達の家まで一緒に帰ったのです。

そうしてあかねちゃんは、いつもより少し遅く、自分の家に帰りました。遅いと言っても、あかねちゃんは小学校に入ったばかり。まだ春ですし、授業も早く終わるので、空は綺麗な青のままでした。

あかねちゃんは玄関の鍵を開けて、いつものように「ただいまー」と声を上げながら、家の中に入りました。いつもなら「おかえり」とお母さんが出迎えてくれるのですが、今日に限って返事はありません。

しかし、あかねちゃんは驚きませんでした。

何故なら、それは当たり前のことだったからです。

あかねちゃんは靴を脱いで、いつもお母さんに言われていた通りにきちんと揃えて、リビングに行きました。

普段ならまずは自分の部屋に荷物を置きに行くのですが、今日はお父さんが帰ってくるまでリビングにいよう！　と、あかねちゃんは決めていたのです。

リビングのテーブルの上に、一枚のメモがありました。

あかねちゃんはそれを手に取ります。

そこには、お母さんからのメッセージが書かれていました。朝も言ったけど今日は出かけるから、夕飯はお父さんと食べて、良い子にしているように……と書かれていました。

あかねちゃんはメモに対してふむふむ、と頷いて、その下に置かれていた皿を見ました。そこには美味しそうなおやつが乗っています。

おやつは三時になってから食べるのよ、とメモのお母さんは言いました。

あかねちゃんは時計を見ます。

時計の正しい見方は知らないあかねちゃんですが、いくつかの時間は覚えています。朝、短い針が六を指していたら起きる時間。短い針が八を指したら家を出て学校に行く時間で、学校から帰ってきて、短い針が三を指したらおやつの時間。その後、短い針が九を指したら寝る時間なのです。

時計の針は、二を少し過ぎたところでした。

残念、とあかねちゃんは肩をすくめます。早くおやつを食べたいのですが、まだおやつの時間ではありません。誰もいないから早く食べてしまおうかな、という考えが頭をよぎりましたが、それを即座に却下するくらいには、あかねちゃんは良い子でした。

あかねちゃんはリビングの片隅に置いたランドセルから筆箱とノート、それを一枚のプリントを取り出して、静かに宿題を始めました。今日の宿題はカタカナの練習と、引き算のプリントです。

宿題が終わったのは、ちょうど時計の短い針が三を指した頃でした。あかねちゃんは宿題をランドセルにしまって、おやつの乗った皿を引き寄せます。

皿に乗った二つのドーナツを食べ終えたところで、あかねちゃんは『音』を聞きました。

コトリ。

ん？　とあかねちゃんは背後を振り返りますが、当然誰もいません。

あかねちゃんは少しだけ怖くなりました。お父さんが帰ってくるのは、確か時計の短い針が五を指す頃。それまで一人なのは、急に心細くなりました。

友達の家に出かけようかな、と一瞬考えますが、行き先をお母さんに言わずに出かけては駄目よ、と言われているのを思い出します。

コトリ。

再び鳴る音に、あかねちゃんは凍りつきます。

今度は振り返ると『ナニカ』が起こる気がして、振り向けません。

凍りついたまま、動けないまま、あかねちゃんは音が何処から聞こえてくるのか、一生懸命考えます。

コトリ。

しかし音は反響して、出所が掴めません。むしろ『それ』がたくさんいる気がして、余計に怖くなりました。

「何をしているんだ？」

そんな声にビクッとし、あかねちゃんはすぐに声が聞き覚えのあるものだったことに気付きます。ふと見れば既にリビングは暗く、入り口にはお父さんが訝しげな表情を浮かべて立っていました。

「お父さん！」と駆け寄って抱きつくあかねちゃんをお父さんは受け止め、「今日は甘えん坊だなぁ」と不思議そうな顔で頭を撫でます。

あかねちゃんはお父さんが帰ってきたことで、安心しきっていました。あの音も聞こえないしもう大丈夫、後はお父さんが作ってくれる夕飯を食べて早く寝て、明日になればきっともうすっかり忘れて友達といつものように学校に行っていつものように勉強をして給食を食べてそうだ明日は友達と遊ぼうお母さんも明日は家にいるからきっと美味しいおやつを作ってくれると……

そしてそれは実際途中まではその通りで、あかねちゃんはお父さんの作った夕飯を食べてお風呂に入って、笑顔でお父さんに「おやすみ」と言って「おやすみ」と返されて、笑顔で階段を上って自分の部屋に行ったのです。

そして明日も楽しい一日であることを信じて、ベッドの上で目を瞑りました。

コトリ。

不意に聞こえたのは、そんな音でした。
恐怖に息を呑むあかねちゃんの耳に、続いて話し声が聞こえます。

《やっぱり気付いているよこの子》
《ほら早く眠れば良いのに》
《もう起きられないけどね》
《僕には右腕をくれるんだよね》
《私は左足を貰うのよね》
《じゃあわたしは右足を》
《俺は左腕を》
《ボクは頭を》
《ワタシは脳を》
《オレは心臓を――》

ゴトリ。

あかねちゃんはベッドから勢いよく飛び降りました。

（そうだよおとうさんだおとうさんのところへいこうこわいからいっしょにねようっておとうさんがいればだいじょうぶきっとだいじょうぶおとうさんがわるいものなんかこわいものなんかぜんぶぜんぶおいはらってくれるから）

あかねちゃんは心の中で呪文のように呟きながら、なるべく部屋の中を見ないようにドアに駆け寄り、ドアノブを掴み、捻りました。

「あれ……！？」

ところがドアノブはガチャガチャと音を立てるばかりで、ドアは開きません。

あかねちゃんは焦って力いっぱいドアノブを揺らしますが、結果は同じ……

叫んで助けを求めようとしても、恐怖に強張った自分の体は上手く動かず、口からはかすれた「たすけて……」という呟きが漏れるばかり。

べちゃっ。

さっきまでとは明らかに違うその音に……
あかねちゃんは恐る恐る、まるでロボットのように、ギギギと後ろを振り返りました。

「ひっ……！？」

あかねちゃんは思わず息を呑みました。
いえ、これを見て息を呑まない人などいないでしょう。

まるで天井から投げ捨てられたかのように無造作に転がっている、切り離されたかのような人の右腕と人の左足と人の右足と人の左腕とこちらを睨みつける上半分の無い人の頭と、そして恐らく人のも

のである脳と……

赤い液体のついたそれらは、暗い部屋の中で白く浮かび上がって見えました。

最早声も出ないあかねちゃんの前に、もう一つ……

べちゃっ。

そんな音を立てて落ちてきたのは……
一つの、赤く光る、恐らく人のものである心臓でした。
そしてあかねちゃんは、こんな声を聞くのです……

《キミにも、落としてもらおうか》

こころちゃん（前書き）

執筆担当：にゃー

こころちゃん

その日、あかねちゃんは、ご機嫌斜めでした。
お友達とけんかしたからです。

「何で約束破るのよぉ…」
不満そうなあかねちゃんの呟きが聞こえます。
「うちで一緒に七夕の短冊書くって言ってたのに…」
そう、今日は7月7日。七夕の日です。あかねちゃんは今年……2年生になってから同じクラスになったお友達と一緒に短冊に願い事を書く約束をしていました。けれど、そのお友達が、突然、他の子と行くことになったのです。
だから、あかねちゃんは、ご機嫌斜めでした。

ふと、小さな音が聞こえました。あかねちゃんは足を止めて、辺りを見回しました。けれど、何もありません。不思議に思いながら、また歩き始めると、今度ははっきりと、その“音”が聞こえました。
そして、あかねちゃんは、何かに操られるようにして、公園へ入っていきました。少しして、あかねちゃんが公園から出てきました。何かを抱えています。それは、捨て犬でした。
あかねちゃんは、公園に捨てられていたこの犬を連れて帰りました。

お父さんも、お母さんも、この犬を飼ってもいいと言ってくれました。あかねちゃんは、学校で起きたことなんて、すっかり忘れているかのように喜びました。
けれど…
「あかね、今日は七夕よ。はい、短冊。願い事、叶うといいわね」
お母さんが持ってきた短冊を見て、あかねちゃんは、学校であった

あの嫌なことを思い出しました。そして、少しだけ、悔しくなりました。なので、あかねちゃんは、短冊にこう書きました。

ぜったいに、やくそくを守ってくれるともだちが、できますように。

あかねちゃんは、この短冊を、誰にも見せませんでした。もちろん、お父さんやお母さんにも。でも、さっき新しい家族になった、あの犬にだけ、見せてあげました。

「そういえば、この子の名前は、何にするんだ？」

そうお父さんに聞かれて、あかねちゃんは、すぐに答えました。

「コロ！！コロにする！！」

「コロか。可愛い名前だな」

「お世話はちゃんとするのよ？」

「うんっ！！」

元気な声で言って、あかねちゃんは、コロを自分の部屋へ連れて行きました。

その日の夜、あかねちゃんは、短冊を笹に飾って、お父さんとお母さんにおやすみを言って、自分の部屋へ行き、コロにもおやすみをして、ベッドに入りました。

そして、不思議な夢を見ました。その夢は、コロが人間になって、あかねちゃんの一番の友達になる夢でした。とても楽しい夢でした。

それが現実になるまでは。

次の日、あかねちゃんが学校へ行くと、転校生が来るという話で教室がにぎわっていました。そして、先生が転校生を連れて教室に入ってきました。

その転校生の姿を見て、あかねちゃんはとても驚きました。転校生が、昨日の夢に出てきた人間のコロにそっくりだったからです。先生が黒板に転校生の名前を書いている時、転校生が自己紹介をしました。

「伊沼野（いぬの）　心（こころ）です。よろしくお願いします！」

とたんに、あかねちゃんは怖くなりました。“伊沼野心”という言葉が、“犬の子コロ”に聞こえた気がしたのです。

「よろしくね、あかねちゃん」

突然声をかけられて、あかねちゃんはびっくりしました。そこには、こころちゃんが立っていました。

「あ…こころちゃん」

そう言って、すぐ、あかねちゃんは疑問を抱きました。

「え、何であたしの名前知ってるの？」

「あかねちゃんのことなら、何でも知ってるよ。七夕のお願い事も、ね」

その言葉を聞いて、あかねちゃんは確信しました。この人は自分の犬のコロなんだ、と。

「これからは、私があかねちゃんの一番の友達になるよ。だから、あかねちゃんも、私との約束破ったりしないでね」

「うん…」

「じゃあ、今日一緒に帰ろう！」

「いいよ」

「約束、ね！」

そして、帰る時間になりました。あかねちゃんは、昨日けんかしたお友達と仲直りできて、うれしそうでした。そのため、こころちゃんとした約束を忘れてしまっていました。

あかねちゃんは、あの約束を思い出さないまま、他のお友達と家に帰りました。あかねちゃんが家に入ると、そこには何故かこころちゃんがいました。

「何で約束破ったの？ひどいよ、あかねちゃん……」

そう言われて、あかねちゃんは、やっと約束していたことを思い出しました。

「ご、ごめんね、こころちゃん」

「……いいよ」

「え？」

「あかねちゃんが、私だけの物になってくれたら、許してあげてもいいよ」

「……っ」

あかねちゃんが何か言おうとした瞬間、あかねちゃんが光に包まれていきました。

そして、あかねちゃんは、こころちゃんだけの、かわいいかわい

いお人形になってしまいました。
このお人形はお喋りします。『ごめんね、こころちゃん』と……
…。

骨鳴りの吊り橋（前書き）

執筆担当：ｓｈａｕｎａ

骨鳴りの吊り橋

あれは・・・あかねちゃんが小学校3年生の時のお話です・・・
その日、あかねちゃんは自転車に乗っていました。

・・・学校のスグ裏に・・・黒森山という山があります。
街の中央に位置していたその山は私にとってはとっても・・・煩わしい山です。

なぜなら、あかねちゃんの仲の良かった親友の家がその山のすぐ向こう側にあったからです。
つまり・・・あかねちゃんは・・・そう・・・その日も・・・自転車で・・・友達の家に行って・・・
アレが起きたのは、その帰り道でのことでした。

「キラッ☆流星にまった～がぁって・・・♪」

明るい陽気な歌を歌いながら、私は友達の家からの家路を急いでいました。
もう日はドップリと暮れ、太陽は既に山際へと沈んでいました。
黒森山の周りには外周する舗装された綺麗な道路があるんですが・・・
それを通ってたら間違いなく門限には間に合いませんでした。

だから・・・私はその日・・・
黒森山の中をまっすぐに抜ける道を選んだんです・・・
それが・・・まさか・・・あんなことになるなんて・・・

山の中の道は・・・外灯なんて当然無くって・・・道も処々舗装さ

れているだけでした。
いつもは通らない道なので・・・後どれぐらいで山を抜けられるのかはわからなかったです。だから、私は一生懸命自転車を漕いで・・・

そして・・・山の中腹に差し掛かった頃でしょうか・・・そこには・・・

谷があって、一本の吊り橋がかかってたんです。
それはとっても小さな橋で・・・ふと・・・あかねちゃんは昔大人の人から聞いたお話を思い出しました。

『骨鳴りの吊り橋・・・』

この橋は確かそう呼ばれていている橋でした。
そして・・・同時にあかねちゃんは・・・なぜこの橋がそう呼ばれているのかも思い出しました。

その昔・・・この前授業で習った戦国時代という時代に・・・
この谷を超えてきた武士が待ち伏せを受けて・・・この場所で全員が討死したからです。
そして・・・その討死した全員の死体が・・・見せしめとしてこの橋にぶら下げられ・・・やがて死体の肉はカラスに啄まれ・・・腐敗し・・・やがて服と骨だけになって・・・そして・・・谷を吹き抜ける風によって揺らされた骨だけの死体の骨がぶつかって・・・

カタカタと音を鳴らしたからなんだそうです。

もちろん、その言い伝えを嫌がって、街の人達はここには近づこうとはしませんでした。

しかもそれだけじゃなくって・・・
戦争中・・・ここには陸軍の弾薬庫があり・・・事故で大爆発を起こして・・・
何十人もの人が無くなったという事実もあるんです。
だから・・・街の人達は絶対にココには近づこうとしませんでした・・・
ですが・・・
今から戻っていた迂回する道を行ったのではものすごく時間がかかり、家に帰る頃には門限をオーバーしてお母さんに怒られる・・・
あかねちゃんはそれが嫌で・・・その吊り橋の道へと進んでいったんです。

鬱蒼とした木々の中で・・・明かりになっているのは自転車のヘッドライトだけでした。
しかも道は舗装されていないので・・・ガタガタと揺れて・・・おまけに風で木々がザワザワと揺れるので・・・ものすごく気持ちが悪かったそうです。

それにあかねちゃんが乗っているのは小学生用の自転車で・・・
しかも女の子ではそんなにスピードも出ません。
おまけに、自転車の荷台に備え付けた籠には・・・友達と遊ぶときに使ったバレーボールも入っています。
あまり速度を出すと、ボールが落ちて・・・自転車を止めなければなりません。
それでもあかねちゃんは必死に漕ぎ続けました。

やがて・・・風の音が人間の悲鳴のように聞こえてきて・・・
自転車の後ろ側は完全な闇で・・・
あかねちゃんは怖いので・・・必死に漕ぎ続けました。
木々の梢の音が鳴り響き・・・まるでカタカタと骨が鳴っているような気がします。

そして・・・

トットットットットットットットットットット・・・

その足音にあかねちゃんは震えました。
そう・・・間違いなく・・・

誰かが追いかけてきているのです。

必死に急ごうとするあかねちゃんですが、スピードは出ません・・・
そして真っ暗な闇の中から近づいてくる足音はどんどん大きくなっていきます・・・

「うぐっ・・・うぇ・・・」
嗚咽混じりになりながら、あかねちゃんは必死に自転車をこぎます・・・

ドンドン足音は近づいてきます。

トットットットットットットットットットット・・・
「うぐっ・・・えぇ・・・ふぇ・・・」
トットットットットットットットットットット・・・

「え・・・うぇ・・・えええん・・・・」

やがて目の前に・・・骨なりの吊り橋が見えてきました。

そして、吊り橋に足を踏み入れた途端に・・・

がくっ！！！？

ペダルがいきなり重くなりました・・・

そう・・・バレーボールしか無いはずの荷台に・・・

何かが載っているのです・・・

犬や猫などではない・・・明らかに人間と同じ重さのある・・・何かが・・・

振り返ったら死んじゃう！！

あかねちゃんはそう言い聞かせ、重いペダルを必死に漕ぎました。

そして・・・。

吊り橋の中腹に差し掛かった時です・・・

風邪がヒューヒューと鳴る音に混じって・・・

「・・・・・・・このあたりでいいだろう・・・・・」

低い男の声がして・・・

自転車のペダルが固定され、吊り橋の中腹であかねちゃんは動けなくなってしまい、自転車ごと倒れてしまいました。

そしてそれと同時に・・・
荷台のバレーボールが飛び出したのを見たんです。

あかねちゃんは大声でそう叫んで、必死になってそのボールをキャッチしました。
「ダメ！！」

その時・・・
「きゃああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

あかねちゃんは大きな悲鳴を上げました。
なぜなら・・・
見えなかったけど・・・そのときあかねちゃんの掴んだものは・・・
ゴワゴワとしていて・・・重くて・・・
そう・・・つまり・・・髪の毛と・・・皮膚・・・・
つまり・・・

人間の生首だったのです。

「きゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」
叫びながらあかねちゃんはそれを谷底に投げ落としました。

そして再び自転車にまたがり、必死に吊り橋を抜けました。
「あと・・・すこしだったのにな・・・」
谷底から聞こえる・・・そんな声を背に・・・

家に帰ってみると、なんとか門限には間に合っていて、お母さんが玄関で出迎えてくれました。
「おかえりあかね・・・」
「お母さん!!お母さん!!!」
あかねちゃんは必死にお母さんに事情を説明しました。

「これって夢だよね!!夢だよね!!!」
大声で言うあかねちゃんに、お母さんは静かに・・・諭すように言いました・・・
「よく聞きなさい・・・あかね・・・それは・・・夢じゃないわ。」
「え・・・」
「だって・・・ほら・・・」
そう言ってお母さんが指さしたのは自転車の荷台でした。
そして・・・それを見て、あかねちゃんは絶句しました。
なぜなら・・・
そこにあるバレーボールには・・・

顔面を押し当てたような後と・・・無数の髪の毛が絡み付いていたのですから・・・・

るりちゃん（前書き）

執筆担当：るっぴぃ

るりちゃん

その日、あかねちゃんはいつもどおりの下校をしていました。
今日は友達と予定が合わなかったのでひとりで下校しています。
小学6年生にもなるとこういうことが増えてきて、「少しだけ寂しいな」と思っているところで後ろからあかねちゃんを呼ぶ声がしました。

「あかねおねえちゃんっ！　いまかえりなの？」

「あ、るりちゃん。うん、そうだよ」

声をかけてきたのはるりちゃんと言って、今年入学してきたばかりの近所の子です。1年生と6年生が交流する行事で一緒になってから、あかねちゃんにとっては妹のような存在で、よく一緒に遊んでいるのです。
るりちゃんは長い艶のある黒髪を持っていて、髪を伸ばしている最中のあかねちゃんにとってはそれはとてもうらやましく思えてなりませんでした。肩ぐらいまでの髪でもお手入れをするのは大変なのに、るりちゃんはすごいです。他にもるりちゃんは空色の大きくて透き通った瞳をしていて、あかねちゃんから見てもとてもうらやましいです。

「あかねおねえちゃん！　きょうもがっこうたのしかったね！」

「うん。楽しかったね」

「きょうはねー、さんすうでむずかしいもんだいといちゃったんだよ！　へへーん！」

「ホント！？　私は算数苦手だからうらやましいなー……」

おしゃべりをしながらあかねちゃんはるりちゃんに合わせて歩調を緩めて一緒に歩きます。友達と会えなかったさびしさも、もうすっかり消え去ってしまいました。

あかねちゃんの家は学校から歩いて１０分ちょっとですから、そんな時間もすぐに終わってしまいます。

あかねちゃんとるりちゃんはまもなく分かれ道の三叉路にたどり着きました。

「じゃあね、るりちゃん。気をつけて帰って」

「あ！　あかねおねえちゃん！」

「？　なに？　るりちゃん」

「あのねあのね、きょうはるりのおとうさんとおかあさん、おそいみたいなの。あかねちゃんちにいってもいい？」

るりちゃんのお父さんとお母さんは病院につとめていて、帰るのが遅いことも多いのです。そしてあかねちゃんのお母さんが一時期、るりちゃんのお父さんにお世話になったことがあったことから、るりちゃんがあかねちゃんの家に泊まることも多かったのです。

だからこの日もあかねちゃんはこころよく応じたのでした。

あかねちゃんがるりちゃんと一緒のベッドに転がって漫画を読ん

でいると、るりちゃんが読み終わった漫画を閉じて言いました。
「あ、そうだ。あかねおねえちゃんあかねおねえちゃん！」
「なに？　るりちゃん」
「あのねあのね！　おとこのこがこわいはなしをするの！」
「こ、こわい話……？」
あかねちゃんもるりちゃんも、怖い話はあまり好きではありません。それでもあえて口にしたのは、怖くて夜眠れそうになかったからなんだ、とあかねちゃんは思いました。そういうことが以前にもあったからです。
「そうなの。聞いて聞いて！」
「う……、うん……」
「あのね、むかしこのあたりであったことらしいんだけど……」
そう言ってるりちゃんが語り始めたのは次のような物語でした……。

＊＊＊

昔、このあたりに一人の女の子がいたんだって。
名前はわかんないんだけど……、呼びづらいからあかねちゃんって呼ぶね（るりちゃんは他にいい名前が思いつかなかったらしい）。
あかねちゃんは部活をやっていたから、帰るのが遅くなることも多かったんだって。両親からも心配されていて、防犯ブザーを持たされていたの。あかねちゃんは堅苦しいこのブザーのことが気にいってなくって、いつもランドセルにしまってたんだって。

で、この日もいつものように帰りが遅くなって、あかねちゃんはとぼとぼ帰ってたの。あかねちゃんの家は黒森山の向こう側にあったけど、通るわけにはいかないから大きく遠回りしてね。あの森を通って怪しい人に襲われるよりも、それ以外でブザーを鳴らしてくれた方がありがたいって両親が言ったらしいんだけど。
それでも両親に心配をかけたくなかったあかねちゃんは、早足で帰ってたんだって。
そうしたら……。

ひたっ。

突然そんな音が聞こえてきたの。
あかねちゃんは暗くなって静かになったせいで聞こえた空耳だと思って最初は相手にしなかったのね。
でも……。

ひたっ。

ひたっ。

ひたっ。

ひたっ。

ひたっ。

どんどん足音が近づいてくるの。どんどん、どんどん。
怖くなったあかねちゃんは走りだしたのね。足音から逃げるために。そうしたら歩いていたはずの足音が走る音に代わって……。
追いつかれたら殺されるんだ！　って思ったあかねちゃんは急いでランドセルを開けて、嫌いなはずのブザーを取り出したの。大きくてあかねちゃんに不似合いなブザーは、それだけ大きな音を出したの。

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！

あかねちゃんは前に家の近くでこのブザーを鳴らしちゃったことがあるんだけど、その時は親が吹っ飛んできたの。それだけ大きい音だから、この静かな中ではさぞかし広い範囲に聞こえて、自分も助かるって、あかねちゃんはそう思ったの。

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！

だけどおかしいの。だってこれだけ大きな音なのに……。

誰も様子を見に来ないの！

ひた、ひた、って足音がだんだん近づいてきて……。
それでぴたっ、って。
あかねちゃんの後ろに止まって。
あかねちゃんの肩にぽん、って白い手が……。

ビィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！

ビィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！

ビィィィ——

あかねちゃんはその日のうちに助け出されたそうです。
こころが、空っぽの状態になって……。

＊＊＊

るりちゃんが語り終わった時、あかねちゃんは布団にくるまっていました。怖くなってしまったのです。どれぐらいかというと、

「あかねー、るりちゃーん、ご飯よー？」

というお母さんの声に驚いてしまうぐらいです。るりちゃんも一緒になって驚いて、その後になって二人して笑いあいました。二人はお母さんの作ったカレーをおいしく食べました。

二人がカレーを食べ終わると、お母さんが防犯ブザーを出して言いました。

「赤音、瑠璃ちゃんを送っていってあげて」

「るりちゃんのお父さん、帰ってくるの？」

「そうみたい。だから、ね？」

「うん、わかった！　るりちゃん、いこっ！」

正直なところを言えば、あかねちゃんもるりちゃんも暗い道を歩きたくはなかったのですが、そう言っても聞き入れてもらえなさそ

うであることはわかってしまったのです。
あかねちゃんとるりちゃんはいそいそと着替えると、防犯ブザーを片手に家を出ました。
夜になりかけている道は暗くて、ほとんど物音がしません。ぺた、ぺた、ぺた、という二人の足音だけが聞こえています。

ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。

先ほどの怪談のためか、二人の間に会話はほとんどありません。おびえるようにきょろきょろあたりを伺ったり、ちらほらと会話をしたりしながらるりちゃんの家を目指します。

ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。
ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。

ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。

ぺた、ひた、ぺた、ぺた。

ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。

あかねちゃんとるりちゃんは立ち止りました。

そして、ゆっくりと振り返ります……。

そこには……。

しん。

変わったことはなにもありません。
でも今確かに、裸足でアスファルトの地面を踏んだような、柔らかい音がしたのです。聞いただけで不安になる、湿っぽい音が……。

ひた。

ほら、また……。

あかねちゃんとるりちゃんは手をつないで走りだしました。

もうあの怪談と一緒であるとしか思えませんでした。

あの怪談では何が追ってきたんだっけ？　何をされたんだっけ？

何をしたんだっけ、どうするんだっけ、どうしたんだっけどうされてどうして何が何を何して——

ひたひたひたひたひたひたひたひたひたひたひたひた

後ろの足音も早くなっていきます。

次第にあかねちゃんとるりちゃんも追いつかれてきました。　急がなきゃ、急がなきゃという焦りが膨らんでいきます。

そんなに急いでいるはずなのに、るりちゃんの足で5分もかからないはずのるりちゃんの家に一向につきません。何度も何度も、あの分岐点である交差点に帰ってきてしまうからです。でも、そんなことにすら気づけません。

ひたひたひたひたひたひたひたひたひたひたひたひた

ついに背後の存在が迫ってきた時、あかねちゃんはとうとうブザーの栓を抜きました。その大きさは保証済みで、鳴らすだけで近所の家の人が飛んできてくれます。
そしてブザーの大きな音が、音が……。

鳴らない……！

抜いて、抜いて、抜いたのに、間違いなく抜いたのに……。あかねちゃんが何度手元を確認しても、防犯ブザーの栓は抜けたままです。抜けていれば、絶対に音が鳴るはずなのに！　音が鳴れば絶対近所の人が助けに来てくれるはずなのに！
そして、そうして確認している間に、あかねちゃんはとうとう追いつかれてしまいます。

ひた、

とあかねちゃんの真後ろで足音が止まって。
あかねちゃんは固まった体をギギギ……、と振り返らせます。そこには……。

「あかねおねえちゃん！　またげーむおーばーだよ！」

無邪気なるりちゃんの声がして、
るりちゃんの艶のある黒く長い髪の毛が、ざわりと蠢いて、あかねちゃんの方へと……

あとには、髪の毛まみれになった防犯ブザーが残るだけ……。

冷たい心（前書き）

執筆担当：にゃー

冷たい心

その日、あかねちゃんは、泣いていました。
理由なんかありません。ただ、目から涙を流していました。

次の日、あかねちゃんは、学校を休みました。風邪をひいてしまったのです。
「もう、39．7℃も熱があるじゃないの。今日は大人しく寝てなさいよ、赤音」
「うん…」
「じゃ、お母さん今日仕事あるから。ごめんね、一緒にいてあげられなくて」
「大丈夫だよ～。わたしだって、もう3年生だもん」
「そうね。ちゃんと寝てなさいよー」
「行ってらっしゃーい！」
「行ってきます」
そう言って、お母さんは、お仕事に行きました。
「ふぅ…」
あかねちゃんが、布団に入って眠ろうとしていると、

“あの子、昨日泣いたよね”
“うん。僕、それ見たよ”
“じゃあ、持ってるのね「アレ」を”
“たぶんね。フフッ”

という、不思議な会話が聞こえてきました。あかねちゃんは、怖くなりました。風邪を引いていることと、前にもこんな話し声が聞こえて、その後、恐ろしいことが起きたような…。

確かめたいと思ったけれど、声の主を見つけるのも怖いので、あかねちゃんは、布団にもぐりました。
（やだ、やだ。何も見たくない！何も聞きたくない！怖いよ！）
そんなことを考えていると…

“僕らの話聞こえてるのかな？”
“まさか。でも、聞こえてたとしたら、私たちのモノにはできないわね…”
“そうだね。ちぇー。残念ー”

それを聞いてあかねちゃんは、つい大声で言ってしまいました。
「聞こえてるよ！！最初から、全部！！だから、早くどこかへ行って！！」
“それ、ホント？”
「本当だよ！！だから早くいなくなって！！」
“フフッ。何でー？僕らがなんでここにいるか、君、分かってるー？”
“出てきてみなさいよ”
「嫌！！出て行ったら、わたしに変なことするんでしょ！？」
“変なこと？例えば、どんなことだい？”
「……っ」
“どーしたの？黙っちゃって”
あかねちゃんは、突然、動かなくなりました。不思議に思った声の主の１人が、あかねちゃんに近づき、あかねちゃんのおでこに触りました。
“うっわ！熱い！！ユイリ！！ちょっと来て！！”
“熱い？どういうこと？泣いた人間は冷たいはずだよ”
“でも、かなり熱いんだよ。何で？”
“本当だね。ウィルスにやられたのか？”
ユイリと呼ばれた声の主も、あかねちゃんの枕元に来ました。

“ウィルス…。面倒ものが来ちゃったね…”
“やっぱり泣いてすぐに来た方が良かったんだけどねぇ”
“しかたないよ。先に泣いた人間がなかなか泣き止まなかったんだから”
“とにかく何とかするよ、ニコロ”
“オッケー”

そして、夕方になりました。
「うぅ～ん…」
あかねちゃんが、目を覚ますと、お母さんが帰ってきていました。
「赤音！！良かった、熱下がったわよ！」
「お母さん…」
「この様子なら、明日から学校へ行けるわね」
「うん…」

次の日から、あかねちゃんは、また元気に学校に行きました。あの声が聞こえたことは、あまり覚えていません。
けれど、その日から、悲しいことがあってあかねちゃんが泣いていると、またあの声が聞こえてきます。

“君の『冷たい心』をもらいに来たよ…”

鬼の子供（前書き）

執筆担当：篠崎伊織

鬼の子供

その日、あかねちゃんは黒森山の少し開けた森の中で、友達と隠れ鬼をしていました。

最初の鬼はあかねちゃんです。ですがあかねちゃんは、まだ一年生になったばかりの、六歳の小さな女の子。少し影の差す森の中、一人で友達を探すのが、心細くてなりませんでした。

あかねちゃんは少しだけ涙を浮かべながら、神社のお賽銭箱の裏だとか、茂みの陰だとかを順番に覗き込んでいきました。

けれども三人隠れているはずの友達は、中々見つかりません。

次第に辺りは暗くなってきました。日が暮れ始めてきているのです。

早く帰らなければ、お母さんに怒られてしまいます。けれど、友達は誰一人見つかりません。

焦ったあかねちゃんは、夕暮れ時の空を見上げました。

次第にオレンジ色に染まり始めています。あかねちゃんは不安でしたが、それでも友達を探していました。一人で帰ってしまうなんて、出来なかったからです。一人で黒森山を降りるのは心細かったし、約束を破る事はできませんでした。

だから、でしょうか。友達が何処かに隠れていないかと気を配っていたあかねちゃんは、木の上に小さな人影を見つけました。

顔は暗くてあまり良く分かりませんが、その子の背格好は、あかねちゃんと同じくらいです。きっと友達の一人だろうと思ったあかねちゃんは、ほっとして声をかけました。

「隠れ鬼、みいつけた！」

けれど、そう呼んでから少し待っても、その子は木から下りてきません。

あかねちゃんが首を傾げて、もう一度「みつけたよ？」と不安げに言うと、ようやくその子は言葉を発しました。

「あーあ、みつかっちゃった」

けれどその声は、あかねちゃんの知らない声でした。びっくりしてあかねちゃんが瞳を見開くと、その子は木の上からあかねちゃんの目の前へと、音も無く飛び降りてきました。

見たことの無い、けれど綺麗な男の子でした。あかねちゃんと同じくらいの年でしょうか。黒い目のその子は、肩下まで伸ばした直ぐな黒髪を揺らして言いました。

その子のぱつりと切りそろえられた黒髪は女の子のように長かったのですが、あかねちゃんはどうしてか、その子が男の子だと言う事は確信が持てました。

「みつかっちゃあ、いけなかったのに」

くすくすと笑って、男の子は言いました。

あかねちゃんは不思議そうに、男の子にたずねます。

「あなた、だあれ？　どうしてそんな格好をしているの」

男の子は、「僕は桔梗だよ」と、にっこりと笑いました。

桔梗は、あかねちゃんやあかねちゃんの友達の、誰もが着ていないような服を着ていました。

彼が着ているのは真白い水干と呼ばれる装束でしたが、あかねちゃんはそんな事は知りません。ただ、不思議な服だなあとだけ思いました。

「君は？」

「わたし？わたしはあかねだよ」

その答えに桔梗は淡く微笑すると、「そう。でもみつけてしまったなら、仕方が無い」と小さく言いました。

「鬼はみつかっちゃあいけないんだ。だから、みつからなかった事にしなくちゃね？」

あかねちゃんが違和感に気付いたのは、その時でした。

最初は暗くてよく分かりませんでしたが、けれど確かに、あかねちゃんは見たのです。

桔梗の頭に、小さな角があるのを。

それは硬く鈍く、夕暮れの光を反射していました。

「なんで角があるの？」

あかねちゃんはびっくりして、くすくすと楽しそうに笑っている桔梗に言いました。

だって、普通の人には角なんて無いのですから。あかねちゃんにも、友達にも、あかねちゃんのお父さんやお母さんにだってありません。

すると桔梗は、「だって僕は鬼だもの」と、さも当然だというように返してきました。

「鬼に角があるのは当然だろう？」

「ききょうは鬼なの？」

あかねちゃんはびっくりして言いました。

鬼は、もっと恐ろしいものであるはずなのです。あかねちゃんと同じくらいの、こんなに綺麗な男の子であるはずがありません。

大きな口と大きな爪、大きな体を持った、恐ろしいイキモノであるはずなのです。お母さんが読み聞かせてくれた絵本には、ちゃんとそう書いてありました。

「そうだよ？　それ以外の何だっていうのさ。僕は鬼だ。人の子にはもう、見つかってはいけないイキモノだ」

けれど桔梗は、おかしそうにそれを肯定します。

ゆうるりと、桔梗の瞼が少しだけ伏せられました。

あかねちゃんは少しだけ後ずさりましたが、それ以上は逃げられません。あかねちゃんは自分の背中に、木の幹が当たるのが分かりました。

「でも、見つかってしまったんだから……僕がきちんと責任もって食して、僕の一部として取り込んで、無かった事にしてしまわないと」

桔梗が口元を吊り上げて、草を踏み分けて歩み寄ってくるのを、あかねちゃんは泣きそうになりながら見ていました。

きっとあかねちゃんは食べられてしまうのでしょう。夕闇は差し迫り、周りに自分達以外、生き物はいません。あたまからぱくりと一口に喰われてしまうのでしょうか。それとも、指先から少しずつ？

「……っ」

ただ怖いだけなのです。けれど、無性に恐ろしくて仕方が無いのです。

本能的な恐怖に、あかねちゃんはとうとう泣き出してしまいました。

声を上げるわけでもなく、ただ涙がぼろぼろと流れるのです。嗚咽だけが、夕暮れの中響きました。

桔梗はそれを見つめたまま、すうっと爪のとがった指を、あかねちゃんの首筋に沿わせてきました。

「でも、今はまだ食べられないね。『七歳までは神の眷属』だもん。喰べたら僕が怒られちゃう」

あかねちゃんは、その言葉をよく理解する事はできませんでした。けれど、少しだけほっとしました。

自分はどうやら、食べられなくてすむようです。だって、怒られるような事は、やってはいけない事なのですから。

桔梗だって、きっと怒られるような事はやらないはずです。あかねちゃんを食べたりはしないはずです。

「じゃあ、八歳になるまで待って、そうしてゆっくり食べよう」

そう、今は。

「僕の獲物だって印をつければ、馬鹿な奴ら以外は手を出したりはしないよね」

楽しそうに、うきうきと桔梗は言いました。

柔らかそうな幼い子供の肉も、くるくるとよく動く目玉も、とても美味しそうです。桔梗はまだ生まれてから百年程度の幼い鬼でしたから、自分で人の子を狩って食すのは、あまり経験をした事がありませんでした。

けれども失敗するつもりはありませんでしたし、むしろ余裕を持って楽しんでいました。

次第に空が仄暗くなっていきます。

夕闇の中で、桔梗はつい、とあかねちゃんの首筋にあてがった、右手の指を動かしました。

「痛いっ！」

あかねちゃんの首筋に、すっと紅い線が浮かび上がりました。

桔梗がその硬質な爪で、引っ掻いて、傷跡をつけたのです。首筋に浮かび上がった傷からは、少しずつ、少しずつ、つうっと血が流れ出します。

桔梗は確かに鬼でした。体も小さく、声音も恐ろしいものではありませんでしたが、小さな角と、刃物のような爪を持っていました。

あかねちゃんは痛みに声を上げ、反射的に後ずさりかけましたが、相変わらず背中には木の幹が当たっていました。

対して桔梗はいつの間にかその左手で、あかねちゃんの右肩を掴んでいました。あかねちゃんは首筋が痛くて、ひそりと笑んでいる桔梗が怖くて、必死に逃げようともがきましたが、強い力で右肩を引きよせられたため、それも叶いません。

あかねちゃんは、本能的にびくりと硬く目を閉じました――あまりにきつく閉じすぎて、一瞬視界が黒い闇ではなく白に染まりました。

そして首筋に暖かいぬくもりが触れて、次いでざらりとした何かに血を拭われるのが感じられました。

瞳をあける勇気も、声を上げる余裕も、あかねちゃんにはありませんでした。

あかねちゃんのぎゅっと閉じられた目の端から、ぼろぼろと涙がこぼれます。ぴちゃりぴちゃりと言う、生ぬるい音が耳元で聞こえました。

しばらくそうやってこらえていると、不意に水音が止みました。

「ねえ、僕を見つけた人の子供。ちゃんと迎えに来るからね。齢が七つをこえたらその時は、今度こそ僕の晩餐にしてあげる。だから――」

それまで、ダレにも喰らわれちゃ駄目だよ、赤音。
吐息交じりのその言葉が、耳元で囁かれたのを最後に、唐突に首筋と肩に触れていたぬくもりが消えました。
それでもあかねちゃんは、すぐに瞼を押し上げることも、動き出す事もできませんでした。
どれほど時間がたったでしょう。おそるおそるあかねちゃんが目を開けると、あたりはもう薄暗くなっていました。
周囲を見回してみても、桔梗はもう何処にもいませんでした。
あかねちゃんは少しだけほっとして、服の袖口でなみだに濡れた顔を拭いました。もう、涙は止まっていました。
ふと気になって、自分では直接見ることの出来ない首筋にも指をやりましたが、痛くもないし血もついてきません。
――あれは、桔梗がしたことは、それとも桔梗の存在は夢だったのでしょうか？　……そうです、夢に違いありません。だって、鬼に食べられてしまうなんて、そんな事はあるはずはないのです。桔梗がいた事だって、もしかしたら夢かもしれませんでした。
あかねちゃんは少しだけ不思議に思いましたが、それは夢だと思うことにしました。恐ろしい事は、現実にはない方がよいのです。
それでも、足元のがたがたと言う震えは、中々止まってくれませんでした。
しばらくあかねちゃんがその場に留まっていると、がさりがさりという、枝葉を踏む足音が聞こえてきました。
びっくりしてあかねちゃんが音のした方へ振り向くと、そこには、友達のみずきちゃんとはづきちゃんが、心配そうに立っていました。
「あ、あかねちゃん！よかったあ、中々探しに来ないから、どこかに行っちゃったかと思った！」
みずきちゃんが、ほっとしたように言ってあかねちゃんに駆け寄

ってきました。

「山の中、広いもんね。あかねちゃん、まいごになっちゃったんだよね。でも、みつかってよかったよう」

はづきちゃんも続けます。

あかねちゃんは友達に会えてほっとしたのと、あたりがすっかり薄暗くなってしまった不安から、一度は止まっていた涙が、またぽろぽろと溢れ出しました。

「あかねちゃん、怖かったの？」

みずきちゃんが、心配そうに言いました。

怖かったのです。とてもとても。けれど鬼に会ったなんて言えません。だって鬼は、絵本や昔話の中にしか出てきてはいけないのですから。

桔梗だって、もう見つかってはいけないのだと言っていました。

あかねちゃんはこくりと頷くと、ふと、自分の思考の違和感に気付きました。

――桔梗と会ったのは、夢だったのに、どうして？　どうしてあかねちゃんは、鬼の夢を話してはいけないなんて、真剣に思ったのでしょう。

「あれ、あかねちゃん、首の所に怪我してるよ」

はづきちゃんが、不意に言いました。

「本当だ。真っ赤になって、ぱっくりわれちゃってる……大丈夫？」

みずきちゃんも心配そうに聞いてきます。

「え……？でも、だって」

爪で引っ掻かれて。傷を付けられたのは、八歳になったら食べに来るって、鬼の子供が言ったのは、夢じゃ。

――山の木立の枝葉の上で、昇り始めた月の光を受けて。あかねちゃんの顔が恐怖に歪むのを見て、鬼の子供は満足そうに嗤いました。

はこの中（前書き）

執筆担当：ｓｈａｕｎａ

はこの中

その日あかねちゃんはお留守番をしていました。
外は大雨・・・小学校2年生のあかねちゃんは学校からバスで帰ってきてから遊びにいくことも出来ずに、ずっと家でひとり遊んでいました。

ボーンボーンと時計の針が１６時を告げます。
「まだ4時か・・・」
さみしそうにあかねちゃんはつぶやきました。

その時でした・・・
ピンポーン・・・

チャイムの音が鳴り、あかねちゃんはインターホンの受話器を手に取りました。
「はい、成江です。」
「すいません・・・バス会社の者ですが・・・」
それはあかねちゃんが先程まで乗っていたバス会社の運転手さんでした。
「近くでバスが事故をおこしてしまって・・・申し訳ありませんが、この雨ですし、少しだけ玄関先をお借りして、代わりのバスが来るまで、お客様を雨宿りさせていただいてもよろしいでしょうか？」
詳しく聞くと、どうやら近くでバスがスリップしてしまったので、代わりのバスが到着するまでの間、乗っていたお客さんを雨宿りさせて欲しいとのことでした。
「わかりました・・・」
あかねちゃんは静かに運転手さんに同意しました。

数分後・・・

入ってきたお客さんは2人でした。
白い装束に身を包んだお遍路みたいな感じの老人2人組で、大きな荷物を2人で持って玄関へと入ってきました。
「では、私は代わりのバスを用意するように営業所に行ってきますので・・・」
運転手さんはそう言い残してどこかに行ってしまいました。
家に残されたのはあかねちゃんと2人の老人だけでした。
「ねぇねぇ・・・そのお荷物の中・・・何が入ってるの？」
あかねちゃんは2人の持っていた荷物を指さして言いました。
「この中にはね・・・絶対に見ちゃいけないものが入ってるんだよ・・・」
老人の一人はそう答えました。
「ふ～ん・・・」
とっても見てみたかったのですが、あかねちゃんは素っ気なくそう答えました。
「そうだ！！私、お茶淹れてくれてくるね・・・。」
あかねちゃんはそういってお礼を言ってくれる老人たちに深く礼をしてパタパタと台所に走っていきました。
お茶を淹れながらあかねちゃんは思いました。

あの箱の中には何が入ってるんだろうと・・・
すると・・・

「お嬢ちゃん・・・すまないけど・・・お手洗いを借りられるかな？」

先程の老人2人がトイレに言ったとき、あかねちゃんは急いで先程の箱まで行き、そして・・・

その箱の前に立ちました。

それは大きめの旅行鞄ぐらいの箱でした。
それは白い箱で、白い布で覆われ、封をされていました。
それは、横に置かれており、前と後ろにそれぞれ持ち手がついていました。

ゴクッと息を飲み、ゆっくりとあかねちゃんはその紐を解いていきました。
そして紐を解くと、静かに布を取り払いました。

目の前に真っ白な箱が姿を現しました・・・。

そして・・・静かに蓋を開けると・・・
そこには・・・

あかねちゃんは見てはいけないものを見てしまいました・・・
そう・・・箱の中に入っていたのは・・・

死んだ自分の躰・・・
自分自身の死体だったのです。

「おいおい・・・見られちまったぞ。」
後ろからした声にあかねちゃんは慌てて振り返りました。
するとそこには・・・
先程お手洗いに行ったはずの老人2人がほくそ笑んでいました。
「あ・・・あの・・・ご・・・ごめんなさい・・・」
泣き出しながら謝るあかねちゃんに老人たちは静かに笑いながら近

づいていきます。
「バレたからには仕方ないだろ・・・」
「そうだな・・・一緒に連れてくか・・・」
「だな・・・」

「あ・・・あの・・・ほ・・・本当にごめんなさい!!私知らなかったんです!!!」

必死に謝っても老人たちは許してくれません。
そして・・・

「やだ!!!何するの!!!離して!!!!」
大声で叫ぶあかねちゃんの手足を掴んだ老人たちは、暴れるあかねちゃんを・・・
彼女の死体の入った箱に押し込んでいきます。

「何するの!!!やめて!!!!!」

叫ぶ声にたんすや机の上からドンドン物が落ちました。

そして・・・
「やめて!!!やめてよ!!!おねが――――――――――」
・・・

パタンッという音と共に・・・蓋が閉じられました。

そして・・・老人たちはそのままその箱を背負って、家を出ていきました・・・

誰もいなくなった家の中で・・・

あかねちゃんが暴れた拍子に、テーブルから落ちてスイッチの入った、買ったばかりのテレビがニュースを告げていました。

“本日、午後3時半頃。I県のK市でバスの滑落事故が起きました。この事故により、運転していたバス会社従業員、真嶋英彦さんと乗客の一人が亡くなったということです。バスは谷底に陥落したため、遺体は見つかっていませんが、同級生などの証言から、警察はこの乗客が、小学校から下校途中の成江あかねさんのものとして、調べを進めています。”

柱時計の鐘が6時を告げる頃・・・仕事からお母さんが帰ってきました。

「ただいま～・・・あかね～・・・いないの～・・・・」

その声は酷く静かに家に響きわたりました・・・

その後・・・このお母さんが娘の死を知ってどうなってしまったのかは・・・

言うまでもないことです。

水の姫（前書き）

執筆担当：高良あくあ

水の姫

その日、あかねちゃんは五年生になって初めての水泳の授業に出ました。

水泳と言ってもまだ小学生、せいぜい泳ぎのレベルによっていくつかのコースに分かれて、それぞれ自分のレベルに合った練習をする程度です。厳しい練習などは殆どありません。

体を動かすのは好きですが泳ぎが苦手なあかねちゃんは、他の泳げない子達と一緒に、ビート板を使って顔を水につける練習をしたりバタ足の練習をしたりしていました。

同じコースの友達の中には泳ぐのが嫌いな友達も多いのですが、あかねちゃんは泳ぐこと自体は嫌いではありませんでした。ただ、ちょっと泳ぐのと走るのは勝手が違うから上手くいかないだけで……

でも流石に小学校に入って五年目です、その面影も次第に無くなって、あかねちゃんの泳ぎはどんどん上達していました。

「っぷは！」

「頑張ってるねー、あかねちゃん」

「みずきちゃん！」

息継ぎと休憩を兼ねてプールの底に足をつけ、顔を上げたところで、あかねちゃんは隣のコースの子から声をかけられました。

家が隣同士で、小さい頃からの大親友のみずきちゃんです。

あかねちゃんと違って泳ぎが得意なみずきちゃんは、あかねちゃん達が泳いでいるコースの隣のコース、泳ぎが一番上手な子達が集まるコースで、それはもう素敵な泳ぎを見せていました。

「あかねちゃんも随分上手になったねー。そろそろ次のコースいけるんじゃない？」
「うん、頑張るよー！　まだまだみずきちゃんには敵わないけど」
「えー、でもここまで来れば、泳ぎ方なんてすぐに覚えられるもん。あかねちゃんならすぐに追いついてこられるよ」
「だと良いんだけど……っと、こんなところで話してたら怒られちゃう」
「そうだった。ま、授業ももうちょっとで終わりだし、お互い頑張ろっか」
「うん！　じゃ、また後でねー」
「そだねー、後で」

軽く頷き、手を振って、みずきちゃんは水泳を習っている人達に負けない綺麗なフォームで泳いでいきます。
あかねちゃんは「凄いなぁ」と一瞬それを眺めた後、慌ててその後を追いかけていくのでした。

バシャバシャと、水を蹴りながら……

その日の放課後、あかねちゃんはいつものように、みずきちゃんと一緒に帰っていました。
お互いに何か用事があったりするとき以外は、いつもこうして一緒に帰っているのです。
「でさ、あの子それ聞いてびっくりして、その勢いでチョーク入れ

ひっくり返しちゃってさー」
「あははー、それで私が帰ったとき粉だらけだったんだぁ……あ、ねぇみずきちゃん、今日忙しいんだっけ？」
「え？　……どうして？」
「うーん、大したことじゃないんだけどねー。今日の算数で分からないところがあったから、教えて欲しいなぁって」

あかねちゃんは苦手な教科がいくつかあるのですが、みずきちゃんにはそれがありません。小さい頃から、みずきちゃんは勉強も運動も得意な皆の人気者で、あかねちゃんはそれが誇らしくも羨ましくもあったりするのでした。
なので、いつも授業で分からないことがあったときはみずきちゃんに教えてもらうのですが……

「そっかー。でもごめんね、今日はちょっと本当に無理かも」
「そうなんだ……じゃあ明日の朝、ちょっと早めに学校行って……じゃ駄目かな？」
「良いよ。あかねちゃん、迎えに来てくれる？　ほら、私、朝弱いから」
「うん、分かった～」

会話が一段落して、一瞬の静寂が訪れます。
それを破ったのは、あかねちゃんの隣を歩くみずきちゃんでした。
「うーん、話が無くなっちゃったね……それじゃ、怖い話でもしよっか」
「こ、怖い話？」

あかねちゃんは、ちょっとだけびくびくしながら答えました。
というのも、あかねちゃんは小さい頃から怖い話が苦手なのです。

そしてみずきちゃんはそれを知っているはずなのですが、それでもみずきちゃんは時折こうしてあかねちゃんに怖い話をしては、あかねちゃんが怖がるのを見て楽しそうに笑うのでした。

「あ、あんまり怖くない話が良いなぁ……」

「うん、大丈夫。すぐに家に着いちゃうし、それほど怖い話でも無いから」

みずきちゃんはポニーテールにした髪を揺らして振り返りました。一年くらい前までショートだったのがようやく背中にかかる程度になってきたその髪は、光の当たり方によっては少し青みがかって見えてとても綺麗です。

だけどあかねちゃんが見惚れる暇も無く、みずきちゃんは振り向きました。その表情はいつもみずきちゃんが怪談を話すときと同じ真面目なもので、みずきちゃんはこうして怖さに拍車をかけているのでした。

「あかねちゃん……『八百比丘尼』って、知ってる？」

「はっぴゃく……びくに？」

「そう。やおびくに、とも言うんだけど……それは、こんな話なの」

そうして……みずきちゃんの話は、始まりました。

＊＊＊

むかしむかし……とある村のとある家に、村の人達皆が招待されました。

そこではたくさんの美味しい料理が出されたんだけど、その中に『人魚の肉』って言うのがあったのね。うん、その人魚だよ。マーメイド。上半身が人で下半身が魚の、あれ。

え？　何でそんなものを料理として出したのかって？　あかねちゃん、良いところに気が付いたね。そう、それなんだよ。

というのも、その頃は『人魚の肉を食べれば永遠の命と若さが手に入る』って言われていたのです。

俗に言う『不老不死』って奴ね。ほら、皆憧れるでしょ？

で、その村の人達ももちろん最初は食べる気でいたんだけど、土壇場でやっぱり気味が悪くなっちゃったのね。そこで皆で話し合って、それを持ち帰って帰り道でこっそり捨ててしまいました。

だけど……ね。

一人だけ、話を聞いていなかった人がいたの……

その人は皆と同じように肉を持ち帰りはしたんだけど、それを捨てずに隠しておいたのね。

そしてある日のこと……その人にはとても綺麗な若い娘さんがいたんだけど、その娘さんが偶然それを見つけて、人魚の肉だと知らずに食べてしまいました。ぱくり。それはとても美味しかったから、娘さんは人魚の肉を全て食べてしまいました……あ、あかねちゃんはやっちゃ駄目だよ？　太るからね。

少しすると、元々綺麗だったその娘は、ますます美しくなりました。人魚って美人ばっかりだから、そのせいもあるのかな？
ちょうどそういう年頃だったこともあって、娘にはたくさんの男の人がお付き合いや結婚を申し込み、娘もやがて一人の男の人を選んで、無事結婚しました。

……めでたしめでたし、だったら普通の幸せな話なんだけどね。
あかねちゃんも、きっと予想は出来ているでしょう？

娘が結婚して数年経った頃です。
娘の旦那さんとなった人に、仲間の漁師が言いました。

「なぁ……お前の奥さん、年をとっていないんじゃないか？」

そんなバカな、と旦那さんは笑いましたが、少し考えて気付きます。
あれ？　そういえば結婚したときから、彼女は変わっていないぞ……と。
疑問が確信に変わるまで、そう時間は必要ありませんでした。

数十年が経って、旦那さんの髪の毛が真っ白になっても、娘のお父さん……人魚の肉を家に持ち帰ったあの男の人が死んでしまっても、旦那さんが死んでしまっても、娘は若く美しいままだったのです。

ねぇ、あかねちゃん。不老不死って、ここまで来るともう嬉しくなんか無いよね？
周りの人がどんどん死んでいく中で、娘だけは変わらないまま、何百年も過ぎました。
娘は気味悪がられたり、ずっと若いままでも構わない！　ってい

う変人と結婚したりもしましたが、皆みんな、娘より先に死んでしまいました。

やがて……周りがどんどん変わっていくのに耐えられなかった娘は尼さんになって、諸国遍歴の旅に出ました。要するに、国中を回ったってことね。そうして貧しい人とか恵まれない人を助けたの。

だけど八百年も生きるとそれも耐えられなくなって……誰にも会わないようにって、深い、深〜い洞窟の中に閉じこもってしまったんだって。

それ以来……その娘、八百比丘尼を見た人はいません。

だけどね、あかねちゃん……八百比丘尼は年を取らないし、死なないんだよ。

だから、もしかしたら……今もまだ、どこかで生きているかもしれない。もしかしたらあかねちゃんがさっきすれ違った女子高生の人がそうかもしれないし、まだ洞窟の中なのかもしれない。

本当のところは……誰も知らないんだよ。

＊＊＊

みずきちゃんの話は思ったより長く、終わったときにはすっかり二人の家の前でした。

立ち止まってみずきちゃんの話を聞いていたあかねちゃんは、小声で感想を言いました。

「怖いって言うより……悲しいお話だったね」

「……そう、だね」

一瞬だけ。

みずきちゃんの表情が、揺らぎました。

「うん。悲しい、お話だよ」

「……みずきちゃん？」

不思議に思ったあかねちゃんが首を傾げると、みずきちゃんはすぐに笑顔を浮かべました。

「何でも無いよ。じゃ、また明日ね、あかねちゃん。ちゃんと迎えに来てね？」

「うん、また明日ね、みずきちゃん！　大丈夫、忘れないよ！」

いつも通りの挨拶を交わして……二人は、それぞれの家に入りました。

そう……このときは、いつも通りだったのです。

このときは……。

あかねちゃんは知りません。

八百比丘尼の伝説には、誰も知らない続きがあることを……

八百比丘尼には、一人の娘がいたことを……。

その日の夜のことです。
あかねちゃんは、ふと夜中に目を覚ましました。
「喉、渇いたなぁ……」
そう思ったあかねちゃんは一階の台所へと降りて行って、水を飲んで、部屋に戻ろうとしました。
そこで、『それ』を見たのです。
「……あれ？　みずきちゃん……？」
窓のカーテンの隙間から、一瞬だけ見えた人影……それは、とても見慣れた親友のものでした。慌てて窓の外を覗きますが、間違いありません。あれはみずきちゃんです。
「どうしたんだろう……こんな夜遅くに」
しかもみずきちゃん一人です。夏とは言え真夜中ですから暗く、あかねちゃんは両親に「危ない人がいるから、夜は出歩いちゃ駄目」と何度も言われています。それはみずきちゃんの家でも同じだったはずなのですが……
不思議に思ったあかねちゃんは一瞬だけ考えて、そして物凄く急いで普段着に着替え、こっそり家を出て、その後を追いかけることにしました。
みずきちゃんの後を追いかけながら、あかねちゃんはあることに

気付きました。
みずきちゃんの向かっている方向。歩いている先にあるのは……
「学校……みずきちゃん、忘れ物でもしたのかな？」
でもそれもおかしいな、とあかねちゃんは思います。
みずきちゃんは忘れ物なんか滅多にしないしっかりした子ですし、したとしても普段は夕方くらいには気付いて取りに行きます。少なくともこんな夜中に、しかも一人で行くなんて……。
みずきちゃんは学校の裏、フェンスに穴が開いている部分を潜ります。あかねちゃんは知りませんでしたが、それは校内では割と有名な抜け道で、遅刻した生徒などはここを通ることも多く、上手くフェンスを隠せば分からないため、先生達は気付いていない抜け道でした。
こんな道があったんだ……と驚くあかねちゃんですが、みずきちゃんは勿論待ってなどくれず、スタスタと迷い無く歩いていきます。
あかねちゃんは慌てて後を追いかけました。
やがてみずきちゃんが辿り着いたのは、昼間まで皆で泳いでいたプールでした。
何故、と首を傾げるあかねちゃんに気付かず、みずきちゃんはスッと髪を留めていたゴムを外しました。
ふぁさっ、と広がる伸びかけの髪は透き通るように青く、月明かりに照らされてとても綺麗で――
「あれ？」

あかねちゃんはそこで、思わず声を上げてしまいました。
何故って……みずきちゃんの髪は、あそこまで綺麗な『青』だったでしょうか？

「え……あかねちゃん？」
「あっ……」

驚いている時間が、あかねちゃんにとって命取りでした。

我に返ると、青く目を光らせたみずきちゃんがこちらを振り返って、あかねちゃんを見つめていました。
逃げよう、逃げなきゃ駄目と自分に言い聞かせても、体が動きません。
やがてみずきちゃんの表情は、驚きから笑みへと変わりました。
獣が獲物を見つけたときの、残虐で楽しそうな笑みへ……

「あかねちゃん、そこで何してるのかなぁ？」
「え……あ、えっと……」
「まさか私を追いかけてきた、なんて言わないよね？　あかねちゃん良い子だもん、そんなことしないよね？」
「うあ……えと、その……」

答えに詰まるあかねちゃんは、気付きませんでした。
いつの間にか、みずきちゃんがすぐ目の前にいたことに。

「そんなことしちゃった悪い子には……罰を、与えないとね」

助けて、と叫ぶ暇も無く、みずきちゃんはあかねちゃんの首を掴み、抱き寄せます。

いえ、叫んだとしてもきっと誰も来なかったのでしょう。
だってみずきちゃんはあかねちゃんを押さえつけたまま、声高に叫んだのですから――

「お母様、私に道を」

ざわ、と音を立て、みずきちゃんの青い髪の毛は地に付くほどに伸びました。
ざわ、と音を立て、月明かりに輝くプールの水は大きく割れました。

だけどそこに見えるのはプールの底ではなく青みを帯びた黒い穴で、みずきちゃんはあかねちゃんを抱えたまま、躊躇い無く穴に飛び込みました。

ふと気付くとそこは暗い岩窟の中で、あかねちゃんはみずきちゃんに抱えられたまま、そこに立っていました。
そのわけの分からない状況に、あかねちゃんの恐怖心は一気に膨れ上がります。

「み、みずきちゃん！　ここ、どこ！？　何で私を連れてきたの！？」

「……うるさいなぁ、食料は黙っててよ」
「しょく……りょう？」

その、人に向けるにはあまりにもおかしい言葉に、あかねちゃんは思わず絶句します。
それを見たみずきちゃんはやれやれとでも言いたげに嘆息して、それでも説明してくれました。
あかねちゃんには理解出来ない、したくない説明を。

「あかねちゃん、さっきの『私』を見ちゃったでしょ？　ちょうど良いからお母様の食料になってもらおうと思って。あかねちゃん美味しそうだし、しばらくもつかな？」

「何……言ってるの、みずきちゃん」
「ごめんね。私もまた『年齢を巻き戻す』のは面倒だし、あかねちゃんは好きだし、出来ればずっと一緒にいたかったけど……あかねちゃんが私を追いかけてきちゃうのが悪いんだよ。だからせめて、長く苦しんだりはしないようにしてあげるから」
「……分かんない。分かんないよ私、みずきちゃんが何言ってるのか！　食料って何！？　人間が人間を食べるなんて、そんなのあって良いわけ無いよ！　それに『お母様』って誰！？　みずきちゃんのお母さんは一人だけでしょ！？　私知ってるもん、みずきちゃんのお母さんはそんなこと絶対しない人だし、こんなところにいないよ！」

「違うよ。『お父さん』も『お母さん』も、私の本当の親じゃないもの。私を産んでくれたのはお母様だもの。人魚だから、人を食べたって良いんだよ」

「人魚……！？」
「そう。八百比丘尼って言えば分かるかな？」
「それって、昼間に話してた……」

不老不死の人魚を食べると、不老不死になる。それってつまり、人魚になるってこと？

じゃあ、みずきちゃんの『お母様』って。
じゃあ、みずきちゃんも……

……人魚なの、と。
だからそんなこと出来るの、と。
そう訊ねる暇は、あかねちゃんには与えられませんでした。

「お母様」

みずきちゃんの声と同時に、首筋に鋭い痛みが走ったからです。
それは一瞬だけで、すぐにあかねちゃんの意識は遠ざかっていきました。

「や、だ……死にたくないよ……」

ようやく沸いた死の実感と恐怖の狭間に。
あかねちゃんはふと気付きました。

そういえばみずきちゃんとは小さい頃からの友達だけど……みずきちゃんが赤ちゃんのときの写真は、一度も見たことが無かったな、と。

人が一人倒れる音が、洞窟内に反響しました。

スケッチブック（前書き）

執筆担当：千花

スケッチブック

その日、あかねちゃんは、ベランダから見る風景をスケッチブックに描いていました。
あかねちゃんは自分の家のベランダから見るその景色が大好きで、よくスケッチブックにそれを描いていました。

その日は何故かあかねちゃんは普段は見返さないはずのスケッチブックを見ているとき、気づいたことがあったのです。

最初のページには何もなかったはずの場所に、何枚目かの絵には小さな枝のような絵が描かれていました。
次の絵では、先ほどの枝のようなものが太くなっているのです。

でも何故でしょう、最初には確かにそこには何もなかったはずなのに。

あかねちゃんはベランダへ行き、その場所にあったものを見てみると、遠くのほうに小さく木のようなものが立っていました。
きっと、最初描いているときにはその木には気がつかなかったんだろうなと自分の中で思うことにしました。

次の日、学校の帰り道、校庭を見たときにあかねちゃんは疑問に思うことがありました。

（あれ……？　学校の校庭ににこんな木立ってたっけ？）

一緒に帰っているみずきちゃんにあかねちゃんは聞きました。

「この木って昔からここにあったっけ？」
「何言ってるの、あかねちゃん。昔一緒にこの木の前で写真撮ったじゃない。あかねちゃん、この木に登るの得意だったよねぇ」

と、みずきちゃんは思い出し笑いをしながら言いました。
あかねちゃんはその木に近づくと、何か懐かしいようで、でも思い出してはいけないような不思議な気持ちになりました。

その木から離れようとしたときに、急に何かに服を掴まれたような感覚がしました。
そして後ろを振り向くと、誰かに掴まれたのではなく木に服を引っ掛けてしまったようでした。
買ったばかりのお気に入りだった赤い服が破れて、あかねちゃんはとても落ち込みました。

家に帰って、みずきちゃんに言われたことを思い出して、アルバムの写真を見てみるとやはりみずきちゃんの言うとおり、その木の前で一緒に写真を撮っていました。
あかねちゃんは不安に思いながらも自分の勘違いだと思い、それ以上考えることはやめました。

次の日は丁度学校が休みだったので、いつものようにベランダに出てスケッチブックに絵を描こうとしたときあかねちゃんは驚きました。
家の近くの公園に、確かにそこにはなかった木が立っていたのです。

あかねちゃんはすぐに家を飛び出し、その公園へ向い木に駆け寄ると、あかねちゃんの破れた赤い服の切れ端が残った木が立っていました。

（この木って学校にあった……）

そのとき、

「あら、あかねちゃんじゃない」

声をかけてきたのはみずきちゃんのお母さんでした。
あかねちゃんは挨拶をすることも忘れて、みずきちゃんのお母さんに、

「この木って昔からここにありました！？」

と、飛びつくように聞きました。
すると、みずきちゃんのお母さんは、驚いたように、

「あかねちゃん、みずきがブランコで遊んでたときに、あかねちゃんはこの木に登ってよく遊んでたじゃない？　もしかしたらみずきと遊んでる時の写真が家にあるんじゃない？」

と言いました。
あかねちゃんは走ってまた家に戻り、写真を探しました。
するとやはりみずきちゃんと公園の木の前で遊んでいる写真がそこにはありました。

「それじゃ学校のあの木は……？」

また昨日見た昔学校で撮った写真を見たときに、あかねちゃんは言葉を失いました。
昨日は写っていたはずの木がないのです。
代わりに木の場所に写っていたのは、当時のあかねちゃんと同じくらいの女の子でした。
あかねちゃんはその女の子の顔を何処かで見たことがありました。
ただその時あかねちゃんは、思い出すことはできませんでした。
その日からあかねちゃんは、怖くなってしまいスケッチブックを机の引き出しの中にしまって見ないことにしました。
それから一週間くらい経ったある日、あかねちゃんは学校から帰ってきて自分の机を見ると、そこにはスケッチブックが開いておいてあったのです。
あかねちゃんは恐る恐るそれを見ました。
すると、描いてもいないベランダから見た絵がそこには描かれていました。
ただ一つ違うのは、木がまた近づいてきていたのです。
しかも、次は家の庭を挟んだ正面にです。
そしてその木の上には学校で撮ったときの写真の後ろに写っていた女の子の絵が描かれていました。
あかねちゃんは怖くなってカーテンを閉じ、急いでみずきちゃんに電話をしました。
「みずきちゃん、前下校途中に話した、学校の校庭で木の前で撮った写真覚えてる？」

するとみずきちゃんは、

『あかねちゃん、校庭に木なんて植えてないよ？』
「え？　それじゃあ公園の木の前で撮った写真は？」
『公園ってうちの近くの？』
「うん、ブランコの横にある木だよ！」
『あかねちゃん……ブランコの横には木……ないよ』
「え……嘘……」

電話を終えたあかねちゃんはゆっくりと自分の部屋に戻り、公園の木の前で撮ったはずの写真を見ると、やはり木はどこにもありませんでした。
そしてまた、あの女の子が写っていました。

「やっぱりこの子、何処かで見たことがある気がする」

思い出そうと思ったときに、急にあかねちゃんの目の前にスケッチブックが落ちてきました。　そのスケッチブックは、風もないのに次々とページがめくれていき、先ほどのページまでめくれたときに、ぴたっと止まりました。
あかねちゃんはそのスケッチブックを見たときに、最後のページにも何か描いてあると思いました。
めくりたくもないページのはずなのに、手が勝手に次のページをめくりました。
そこにはただ一本の大きな木が描かれているだけでした。

あかねちゃんはベランダのほうを向き、カーテンのほうに足を進め、かたく閉じたはずのカーテンをゆっくり開けると、目の前にスケッチブック通りのその木が立っていました。

窓を開けて木に近づき、その木をただ眺めていると、後ろから突然何かに服を掴まれました。
あかねちゃんが引っ張られたほうを振り向くと、そこにはボロボロで血だらけの女の子がこちらをじっと見ていました。
そうです、写真に写っていたあの子です。
あかねちゃんはその時、ふと思い出しました。

（ああ、もしかしてこの子……）

占い師”兎奈”（前書き）

執筆担当：ｓｈａｕｎａ

占い師”兎奈”

その日あかねちゃんは、お友達のみずきちゃんと占いをしてました。昼休みに図書室から借りてきた雑誌で星占いをしつつ、2人の今日の運勢を確かめ合っているのです。
雑誌のふたご座のページを見ながらみずきちゃんはあかねちゃんに言います。
「あかねちゃんの今週はね・・・歴史や経済を本から学んでみましょうだって・・・これまで分からなかったことが不思議と理解できるって書いてあるよ～？」
「え～・・・じゃあ、算数の本読んだら分かるようになるかな？」
「なるよきっと！！後ね・・・恋愛運は・・・自然体のあなたで接しましょう、無理して背伸びしても長くは続かなそうです・・・だって・・・」
「ふ～ん・・・あ・・・でも健康運は☆4つだよ！！みずきちゃん」
「ほんとだ！！えっと・・・安眠出来る環境を作りましょう。枕を買ってみては？だって・・・」
「アハハ・・・小学5年生にそんなお金ないよね！！」
「しかも金運は☆2つだしね。値段につられて衝動買いして、後になってから後悔しますだって！！」
「前とぜんぜん吊り合わないよね！！ねえ、次、みずきちゃんは？」
「私はおうし座だから・・・うわぁ・・・最悪・・・全体運も恋愛運も仕事運も☆2つ・・・」
「しかも健康運と金運は☆1つだね・・・」
「えっと・・・何々？・・・友達のトラブルに巻き込まれて焦ってしまうかも・・・こんな時こそ社交性を生かしましょう・・・だって、みずきちゃん」
「そのうえ、他の項目も最悪だよ～・・・どうしよう・・・」
「ま・・・まあ、ほらみずきちゃん。所詮占いだから・・・銀座の

母とか絶対当たる人に占ってもらったわけじゃないし・・・」
「・・・そうだね・・・」
午後の授業が始まる１０分前の鐘が鳴ったので、２人は静かに雑誌を棚に戻して、教室へ戻る為に廊下を歩いていきます。

すると・・・
「でもさ・・・できればそういう銀座の母とかそういう占い師に見て欲しくない？一回でも・・・」
と、あかねちゃんは静かにそう言います。
「う・・・う～ん・・・まあ、見て欲しいかな？」
みずきちゃんもソレに同意します。
「でも私たちじゃ無理だよ。占いってすっごく高いらしいよ。２０分で１５００円とか取るんだって・・・」
「え～！！それって詐欺じゃない！！？」
「ね！！小学生馬鹿にしてるよね！！」
「それに、結構テレビでも占い師っぽい詐欺師のひとも居るみたいだしね・・・」

「それなら・・・」
教室に戻ったところでその声はかけられました。
２人が振り返ると、そこにはボーイッシュな髪型の女の子が立っています。
「はづきちゃん・・・」
２人は同時に声を上げました。
はづきちゃんはあかねちゃんの２つ隣の席の女の子で、２人ともとっての仲の良い女の子だったのです。
「それなら・・・僕の知り合いの占い師さんが居るよ。」

その言葉に2人は同時に目を見張りました。

「「え！！本当！！？」」

そう叫んだのも同時でした。

「うん。ちょっと前に会った人なんだけど・・・お母さんと初めていった占い屋さんで、私も占ってもらったの・・・そしたらビックリ。もうガンガン当たるわけ。言ってもいないことをバンバン言い当てちゃって・・・ホントにすごかったよ。」

「でも、高かったでしょ？」

みずきちゃんの問い掛けにはづきちゃんは首を横にふりました。

「ううん・・・僕も占いって高いと思ってたんだけど・・・そうでもなかったよ。お母さんが持っていったちっちゃい綺麗な瓶でＯＫだったし・・・」

「でも、その瓶高かったんじゃないの？」

「全然。だって居間で埃かぶってたただ古いだけの花瓶だよ。お母さんも『本当にあんなものでいいんですか？』って何度も言ってたし・・・」

「へ～・・・」

「後、私にはお友達も連れてきなさいって・・・」

ソレを聞いて、2人は同時に頷きました。

「はづきちゃん！！今日一緒に行かない？」

しかし、その誘いにはづきちゃんは首を横にふりました。

「ゴメンね・・・ワタシ今日はピアノの日だから・・・」

それを聞いて2人は残念そうに「そっか・・・」とうなだれました。

「でも・・・お店の場所は教えてあげるから、2人だけで行ってみたら・・・」
その言葉に2人は目を綺羅綺羅させました。
「はづきちゃん!!教えて!!」
「うん・・・今から地図描くから待っててね・・・」
こうして、2人で一緒に占い師の元を訪ねることになったのだった。

＊＊＊

一度学校から家に戻ってランドセルを置き、今月のお小遣いを持って2人は地図に書かれたとおりに進むと、そこは・・・ちょっと洒落た洋館がありました。
「なんていうか・・・占い師さんってもっと雰囲気ある・・・紫色のテントとかに住んでると思ったんだけど・・・違うんだね・・・」
「でも・・・」
みずきちゃんの言葉にあかねちゃんは言い返すように玄関の脇に置かれたガラスボードを指差す。そこには・・・
―星水占術―

と磨りガラスに書かれていました。

「とりあえず、入ってみよっか・・・」

みずきちゃんの言葉にあかねちゃんは頷きました。

そして、大理石で出来た階段を一段上がると・・・

「おや・・・」

後ろから渋い男の人の声がしました。

驚いて振り返ると、そこには２０歳ぐらいの・・・黒い髪の毛の男の人が立っていました。

しかも結構な風変わりなスタイルで・・・

男の人は綺麗な・・・アニメで見る中国風の服の上に浴衣のようなローブを着流しているのですが・・・全身真っ黒で、まるでカラスのようでした。

「あの・・・えっと・・・」

「わ・・・私たち占いを・・・」

誰だか分からない男の人の登場にシャイでウブな2人は身を竦めてしまいます。

すると男の人は静かに玄関を指さしました。

そこには・・・

ＣＬＯＳＥ

という文字が書かれたガラスの板がかけられていました。

「火曜は定休日ですよ。」

男の人は言います。

「あ・・・そう・・・なんですか・・・ごめんなさい・・・」
「失礼しました。」
そう言って2人はそそくさと立ち去ろうとすると・・・
「まあまあ・・・」
と男の人は静かに2人の脇をすり抜け・・・
玄関に鍵をさして扉を開けます。
そして・・・
「せっかく来ていただいたのですから、どうぞ中へ・・・」
と言って帰ろうとする2人の背中を押して中へと誘います。
（食べられる！！）（犯される！！）
2人はそう思って震えました。
男の人に通された部屋は、とても風通しのいい部屋で、大きな円卓と幾つかの椅子がおかれていました。
（（こんなところで・・・私たち・・・犯されちゃうんだ・・・））
2人は同時に泣き出したくなります。
すると・・・
「あの・・・」
男の人がまたいきなり話しかけてきて2人はまたビクっと震えました。

「あたたかい飲み物がいいですか？それとも冷たい飲み物が？」
とりあえず安心したかったし、外が寒くて手が冷たかったので、２人は暖かい飲み物を頼みました。
「では、紅茶を用意しますから少し待っててくださいね・・・」
そう言って男の人は部屋の外へと消えていきます。

「どうしよう！！」
あかねちゃんは言いました。
「逃げた方がいいんじゃない！！」
「で・・・でも・・・みつかっちゃったら・・・」
「見つからなくても私たちこのままじゃ、めちゃくちゃにされちゃうんだよ！！あんなわけのわからない男の人に！！」
「で・・・でも・・・」
議論しているうちに男の人が戻って来てしまいました。
「紅茶の腕には自信があるんです。」
男の人はそう言って、２人の前に綺麗な陶器のティーカップを出します。
「あの・・・」
あかねちゃんは静かに男の人に聞きます。
「この中・・・媚薬とか・・・入って・・・ませんよね・・・」
「・・・・・・・」

男の人が固まりました。
（入ってるんだ！！）
同時にそう思ったあかねちゃんとみずきちゃんは涙腺が熱くなります。

「・・・こんな小さな女の子にそんなことを思われて、ウナは悲しいです。」

その得意な言葉使いに2人は顔を見合わせます。
そして・・・
「ウナって・・・」
あかねちゃんはそう問いかけます。
すると男の人はこっちを見て・・・
「天嬢持兎奈（テンジョウジウナ）・・・私の名前です。」
そう答えた。
「うな～？」
「うなうな～？」
2人は首を傾げながら、兎奈を見つめます。
「え・・・ええ・・・そうですが・・・」
「うな～・・・」
「うなな～・・・」
あ・・・なんかコレ楽しいとあかねちゃんとみずきちゃんは思い始めました。

「紅茶には砂糖とミルク以外入ってません。とっても美味しいですから飲んでご覧なさい。」

その言葉に2人は顔を見合わせ、そして・・・同時に紅茶を飲んだ。

「「うな～・・・」」

そのまろやかなおいしさとわずかに香る薔薇の香りに2人は幸せな顔を浮かべました。
「どうです？美味しいでしょう？」
「うな～・・・・」
「うなな～・・・」
とりあえず、この後しばらく2人は幸せそうな顔でウナウナ言い続けました。

「それで・・・2人はどうしてここに？」
兎奈の言葉に2人は紅茶のおかわりを辞めて静かに彼を見つめました。
「あの・・・“うなうな”さん・・・」
「あ・・・私“うなうな“なんですね・・・」
「だめですか？」
「いや・・・かまいませんが・・・続きをどうぞ？」

2人は顔を見合わせて頷き合います。

「私たち・・・占いをして欲しいんです。」
その言葉に、兎奈は静かに頷きました。

「かまいませんよ。」

「それで・・・あの・・・」
とあかねちゃんは続けます。
「私たち・・・お金あんまり無いんで、出来れば安くして欲しいんですけど・・・」

「・・・了解しました。」
兎奈は静かにそう告げます。
ただ・・・
「も！！もちろん、代金は躰で払えってのもだめですからね！！！」
みずきちゃんがそんなことを言い出したものだから、兎奈は椅子から転げ落ちました。

「私は鬼畜ではありません！！！！！！」

「では、とりあえず、２人の名前を・・・」
「「知らない人に名前を教えてはいけないとお母さんから言われてます。」」
「では、鬼畜少女Ａと変態少女Ｂと呼びますよ？」
「「あかねとみずきです。」」
「・・・・・・・・・・」

とりあえず兎奈さんは静かに部屋の隅から綺麗なお盆を持ってきました。
「あの・・・」
「はい？」
「水晶玉とか・・・」
あかねちゃんが言葉を継ぐ間にも兎奈さんはトロトロとお盆を水で満たしていきます。
「私はこれで占うんです・・・」

そして、兎奈はその中に綺麗な粉を何種類も入れていきました。
「それ・・・なんですか？」
「宝石を砕いた粉です。・・・手を出してもどうせ安物ですよ。」

その言葉に2人は出しかけた手を引っ込めました。

「ではまずみずきさん。この中に手を入れてください・・・」
言われるがままにみずきちゃんは静かにその中に手を入れました。
そして兎奈さんの合図で手を出すと同時にタオルを手渡しながら、そのお盆の中を覗き込みます。すると・・・

「ほう・・・みずきさん・・・貴方はとっても不思議な方だ・・・」
と兎奈は静かに呟きました。
「とても頭がよろしいのですね・・・数学を中心にとっても優秀な成績を収めてます。ただ・・・」
「た・・・ただ・・・」
「少しガサツなところがあるかもしれません。それと・・・昨日の夕食のハンバーグは美味しかったですか？」
「！！！！！！ストーカー！！！！！！！」
「・・・違いますから・・・」
兎奈は再び水盆を覗き込む。
「ちなみに・・・貴方の秘密は・・・大丈夫ですよ・・・」
静かな声でそうつぶやくと、みずきちゃんは驚いたような顔をしました・・・
「そしてあかねさんとはこれからもっともっと仲良くなれます。私が保証しますよ。」

そう言ってみずきちゃんの占いは締めくくられた。
そして次はあかねちゃんの番。
水を捨てて新しい水と宝石の粉を入れて、あかねちゃんにみずきち

ゃんと同じ手順を踏ませて・・・
静かに水盆を覗き込み・・・
「ほう」
と嘆息しました。

「あかねさん・・・あなたはかなり不思議な人生を歩まれてますね・・・」
その言葉にあかねちゃんは驚きました。
「え？」
「こんなに様々な霊につかれているかたは珍しい・・・なかにはいくつかとっても強力な霊もいる・・・」
「それって・・・」

「あかねさん・・・気をつけてください・・・もしも道を踏み外したら・・・ゲームオーバーですよ・・・」

兎奈さんは最後にそう言って占いを締めくくった。

「あの・・・うなうなさん。それで代金は・・・」
その言葉に兎奈さんはニコッと微笑む。

「そうですね・・・では、私は甘いものが好きなので・・・お菓子など作っていただけませんでしょうか？」
「お菓子・・・ですか？」
「ええ・・・なんでもかまいません。それこそ卵と牛乳と砂糖混ぜて蒸しただけのプリンでも・・・なんでもいいんです。」
「お金は・・・」
「いりません。」
そして兎奈は最後にこう付け加えた。

「私はね・・・お金よりも・・・そういう人の気持ちのほうが大好きなんですよ。」

と・・・

それからは・・・本当にただの・・・まるで友達の家に遊びに行っているような時間だった・・・2人でクッキーを焼いて、兎奈さんの淹れた紅茶と一緒に食べて・・・そんな感じ・・・

そして・・・

帰りは兎奈さんの来るまで帰りました。

天気予報では晴れると言っていたのに、兎奈さんが雨が降ると言って、車で出発した途端に雨が降り出したからです。

兎奈さんの黒の高級外車に揺られながら2人は午後5時に家に着きました。

まず、みずきちゃんの家に寄って彼女を下ろし、そして次にあかねちゃんの家の前で彼女を下ろしました。

「ありがとうございました。」

そういって、あかねちゃんがドアを開けようとすると・・・

「あ・・・あれ・・・」

何故でしょう・・・開きません。

「迂闊ですよ・・・」

兎奈さんはそう告げました。

「あかねさん・・・あなたはとっても怪異というものに憑かれやすく、怪奇に出会いやすい・・・」

そのとき・・・兎奈を見たあかねちゃんは震えました。

何故なら・・・彼の目が・・・人間ではありえない・・・
赤に染まっていたのですから・・・

「私が悪い妖怪だったら・・・とっくに食べられてましたよ。」

兎奈はそう言って雨の中、後部座席に周り、外からあかねちゃんの側のドアを開けました。
「こまったらいつでも訪ねてきなさい。力になります。」
なんでドアが空かなかったのか、あかねちゃんわかりません。
でも・・・これだけはわかりました・・・

彼は・・・兎奈は人間ではない。
そして・・・彼は・・・しばらくは味方でいてくれる・・・と・・・
雨の中・・・赤い傘をさすあかねちゃんをよそに、兎奈はそのまま車で走り去り、冬の短い日の中へと、消えていきました。

みずあそび（前書き）

執筆担当：るっぴぃ

みずあそび

その日、あかねちゃんは川に遊びに来ていました。お父さんが釣り仲間と行くと聞いていたからです。

川というのは黒森山を流れている名もなき川のことで、あかねちゃんのお父さんはあかねちゃんが小さいころからよく連れてきていたのでした。あかねちゃんはそのたびにお父さんにバーベキューをしてもらって、あ母さんと3人で食べることを楽しみにしているのです。

でも今日はお母さんは来ていません。普段ならあかねちゃんはそのことに腹を立てるところですが、今日に限っては違いました。友達が二人いたからです。

そのうちの一人は昔からの友達のはづきちゃんです。小学1年生のころあかねちゃんよりも少し小さかったはづきちゃんは今ではあかねちゃんより背が伸びてしまって、それがあかねちゃんは少し悔しいのです。そんなはづきちゃんとも、6年生に進級するときにクラスが離れてしまったので最近はあまり話せていないのが少し心残りだったのです。

もう一人はるりちゃんで、あかねちゃんの家の近くに住んでいる小学1年生の女の子で、共働きで親がほとんど家にいないのでよくあかねちゃんの家に来ている子です。今日もるりちゃんはあかねちゃんの家に来ていて、あかねちゃんと一緒にここまで来ました。

そんな三人は今、川で水遊びをするために水着姿になっています。

小学校に入ったばかりのるりちゃんは、買ってもらったばかりの紺色のスクール水着を。無垢で白いるりちゃんの肌にぴたりとフィットしていて、あかねちゃんにはそのコントラストがとてもうらや

ましく思えてなりません。プールと違って塩素がないので、るりちゃんは水泳キャップを被っていません。水につかると特徴のある黒髪がふぁさっ、と広がります。

はづきちゃんは競泳用の水着を着ています。黒い水着はすらっ、とした体型にとても似合っていて、如何にも泳ぐのが早そうです。去年ばっさり切ってから伸びっぱなしにしているという髪も、ふわふわと柔らかそうでやっぱりうらやましいです。

あかねちゃんは白いワンピースタイプの水着を着ています。胸元に赤い星が5つあしらわれていて、フリル部分も赤い水玉でと、赤が少し目だっているのがお気に入りなのです。黒い髪は邪魔なのでくくっています。

3人は準備運動をすると示し合わせたわけでもないのに一斉に川に飛び込みました。

川の水は5月末の温かい気温とは裏腹に冷たくて、3人で水の掛け合いっこをしました。

その次はどこまで泳げるか競走です。るりちゃんは小さいのでハンデ付き。結果は一等賞・はづきちゃんでした。

一旦川から出て、綺麗な小石を探しました。るりちゃんが見つけた小石は蒼く澄んでいて、3人で取りあいっこになってしまいました。結局るりちゃんが持ち帰って、大切に保管することにしました。

そうしたら今度は魚を探します。なかなか見つけられなくて、諦めてしまったと言ったらお父さんは「そりゃそうだ、あかねたちに見つけられちゃったら俺たちが来た意味がないからな！」と言って笑いました。クーラーボックスには何も入っていません。

さて、3人がそんな楽しいひと時を過ごしていた時です。

ふと、はづきちゃんが言いました。

「あれ、るりちゃんはどこにいったんだっけ？」

言われて、あかねちゃんもあたりを見回します。でも、るりちゃんの姿は見えません。そういえばお父さんたちもずいぶん遠くにいます。

念のためこっそりお父さんたちがいるところを見てもみましたが、そこにもるりちゃんはいませんでした。なぜこそこそしていたかというと、あかねちゃんとはづきちゃんはお父さんたちから、「しっかりるりちゃんをみていてくれな」と言われていたので、自分たちがるりちゃんを見失ったと分かれば怒られるかもしれないと思ったのです。

怒られるのは嫌だったのであかねちゃんとはづきちゃんは一緒にるりちゃんを探すことにしました。川に流されてしまったのだとしたら、少し下流にいるはずです。そこそこ広い川だったので、あかねちゃんが左側を、はづきちゃんが右側を探すことになりました。

「はづきちゃん、るりちゃんいた？」

「いないみたい、もう少し下に行こう」

あかねちゃんとはづきちゃんは一心不乱にるりちゃんを捜しました。川には意外と障害物が多く、探すのも一苦労です。時折声を掛け合い、あかねちゃんとはづきちゃんは下流へ下流へとおりていきます。

「はづきちゃん、いた？」

「いないみたい、まだ行く？」

「うん、行こう！」

あかねちゃんとはづきちゃんはどんどん下流へ降りていきます。遊んでいたときはあんなに明るかった空が、今では少しどんよりとしています。水着の体も少し冷えてきました。

「はづきちゃん、いた？」

「いないみたい。もう少しいかない？」

「うん、わかった」

あかねちゃんは水面を叩きます。るりちゃんはいません。
あかねちゃんは岩のそばを確認します。るりちゃんはいません。
あかねちゃんははづきちゃんに声をかけます。るりちゃんはいません。

「もう少し行こっか」

「そうだね」

本当のところあかねちゃんはもう疲れていて、そろそろ戻ろうと言いたかったのですがはづきちゃんは探す気満々のようでした。あかねちゃんはもう少しだけならいいか、と思って先に進みます。
しばらくしても、やっぱりるりちゃんはいません。
あかねちゃんは言いました。

「はづきちゃん、そろそろ帰ろう？　怒られるかもしれないけど、このままだと暗くなっちゃうよ？」

「……」

「はづきちゃん？」

しかしいつまでたってもはづきちゃんからの返事がありません。

「は、はづきちゃん……、怖がらせようとしたって駄目なんだからね……！」

「……」

あかねちゃんはおそるおそる、はづきちゃんがいた右側を振り向きます。

そして、誰もいない川岸を見つけて、あかねちゃんの体中にぶつぶつぶつぶつと鳥肌が立ちました。“そういえば、最後にはづきちゃんを見たのっていつだっけ？”

川岸には斑模様の小さな岩が一つ転がっている以外、何もありません。そこにはづきちゃんが隠れることなど、できるはずがありません。

「は、はづきちゃん！　隠れてないで出てきてよ！」

あかねちゃんの叫びに答える声はありません。

どんよりしていた空は、日が落ちてきたこともあってさらに薄暗くなっています。

「はづきちゃん！　私！　先戻ってるからね！　言ったからね！」

あかねちゃんは鳥肌をどうにかして抑えようと、二の腕をさすり

ながら川を上っていきます。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

あかねちゃんの足が水面に沈む音だけが響きます。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

そして――

「え――――？」

そこは斑模様の小さな岩がある川岸がある、さっき通ったはずの……。

ぞわぁっ、とあかねちゃんの腕に鳥肌が立ちます。

だって、さっきからずっと上流にいってるのに、どうしてここに辿り着くの？

きっとまた巻き込まれちゃったんだ……！

「う、うぅ……。怖いよ……」

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

どれだけ上流に歩いても、同じところに戻ってきてしまいます。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

どれだけ下流に歩いても、同じところに戻ってきてしまいます。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

どれだけそこにいようとも、斑の岩が消えることはありません。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

どこを探してみても、るりちゃんが見つかることはありません。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

どこを探ってみても、はづきちゃんと会う可能性はありません。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

叫んでも、お父さん達はあかねちゃんを助けに来てくれません。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

泣き喚いても、忙しいお母さん達は山にまで来てはくれません。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

あかねちゃんも理解しました、この場所には誰もいないのです。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

とうとうあかねちゃんは疲れて、歩くのをやめてしまいました。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

あかねちゃんが投げる石の音が、あたりに散らばっていきます。

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……」

ぴちゃ。ぴちゃ。ぴちゃ。

「……ん」

「――――え？」

確かに今、声がしました。ここにいるのはあかねちゃんだけじゃなかったのです。
そしてすぐに、次の声がしました。今度はより一層はっきりと

「あかねちゃん。こっちにおいでよ」

そのはづきちゃんの声は、だけどあかねちゃんを恐怖させました。なぜならその声には生気がまったく宿っていなかったのです。
そして、それだけではありませんでした。

「あかねおねえちゃん、はやくはやく！」

「あかね、早く来なさい」

「あかねちゃん、おじさんと一緒に行こう？」

るりちゃんと、お父さんたちの声が……。
それだけじゃない、次から次へと知り合いの声がしてきて――――

「あかねちゃん」。

「あかねちゃん」「あかねちゃん」。

「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」。

「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」。

「あかねちゃん」

「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」
「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」
「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」
「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」
「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」
「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」
「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」
「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかねちゃん」「あかね

ちゃん」「あかねちゃん

翌日、あかねちゃんはベッドの上で目を覚ましました。
あかねちゃんを見つけた人によると、るりちゃんとはづきちゃん、それにお父さんたちは、どこにも見当たらなかったということです……。

今日の桔梗さん

木の陰からじっ、とあかねちゃんの様子をうかがっていました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5846k/

『あかねちゃん』

2011年7月8日00時37分発行